

スナオ/monthly/スガオ

いつだって寝覚めがいいのが自慢。

日曜日の午前九時——鳴る寸前に目覚まし時計を止めた。

しゃかつ！ とカーテン開けて取り込む午前の陽射し。ベッドでうめいて寝返り打った、その背を揺らす。

キミは不機嫌に鼻を鳴らして、背中を丸めた。

あと5分……

抱えた掛け布団に埋めた、くぐもる声。

八つ当たり気味に背中を叩いても反応なし。

あきらめてキッチンへ。

フライパンを左手に、右手には卵を2つ。

かつかつとコンロの火を付けて、熱したフライパンに油を敷く。左右の手でそれぞれ割った卵は、フライパンに落ちるなり寄り添った。

じゅわわわわ。

弱火にしてフタを閉じる。

冷蔵庫から取り出した牛乳をコップに注いで一気飲み。

ぷはーっ。

牛乳を戻したところでベーコンとご対面。

おはよう。いるなら言えよ。ベーコンエッグにしてやったのに。

冷蔵庫に放置して、フライパンのフタを開けばいい塩梅。水を注いだら、じゅわわじゅわわ。湯気ごとフタで閉じ込めた。

さて。ここで取り出しますはヤマ○キの6枚スライスパン。残り2枚なり。

にやり。

黄身が白くなった目玉焼きを挟んで、いただきます。

3口目で黄身が潰れて。

4口目で指先の黄身を舐め取って。

6口目でキミが起きた。

膨張した頭を掻きながら、ギリギリ開いたまぶたで見たのはパン袋。ついさっきから燃えないゴミ。

そんな目で見たって知らないよ。起きないキミが悪いんだ。

ふてくされたキミはテレビを付けて社会情勢を見つめるけど、大してキョーミがないって、アクビが即証明。

満腹感をみぞおちに見付けて、残ったパンをキミにお届け。

「食べる？」

つまんだパンにかぶり付いたキミは犬に似てる。

気紛れで寝癖の似合う、飼い慣らすには少しばかり手に余る犬。

キミの頬についた黄身をキスで拭った。

「朝イチバン、モーニングクーズ！」

「ねむ……」

「今日は何の日でしょう？」

「ねむ……」

「何の日でしょー？」

「ねむ……いたいいたい」

頬を引っ張って横に伸びる顔。

今日は3月、第3日曜日。

寝惚けたまんまキミが言う。

「1年記念日？」

「それは先週」

「同棲半年記念日？」

「それも先週。しかも同じ日」

「んー？」

「忘れた？」

「忘れてないッス」

キミは壁にかかったカレンダーを指差すと、またアクビした。アートだと言つてキミの買ったカレンダー。アートが何なのかなんてわからないけど、今日の日付に入ってる赤い星はわかる。

「準備すつかあ」

大口開けて背伸びするキミに頷いた。

半分眠ったまんまのキミと並んで歯を磨く。

青いハブラシと白いハブラシ。

しゃこしゃこ。しゃくしゃく。

2つの顔が映る鏡がスキ。

キミがいつも、めいっぱい歯磨き粉を使ってくれるおかげで、チューブの残りを気にするようになった。

チューブの絞り方が上手くなったよ。

キミがトイレに入ってる間に着替える。ジーンズとパーカー。一緒に暮らし始めて半年経つけど、着替えてるところを見られるのは気恥ずかしいから。

パンツ一丁でウロウロするキミは笑うけどね。

顔を洗ってから、キミとトイレ交代。

「ちよっと待った」

キミが差し出したトイレトペーパーを受け取って、いざ引きこもり。

なるほど。確かに半分しかない。

でもそんなに使わないってば。

活躍を次回に見送られたトイレトペーパーが不憫に思えて、こもってる間ずっと持つといてあげた。

トイレから出たら、鏡の前で首を傾げてるキミがいた。

「どうしたの？」

「ヒゲって剃るべき？」

「いいんじゃない？」

「……それってどっち？ 剃っていいの？ 剃らなくていいの？」

「剃らなくてもいいんじゃない？」

「了解」

そういつて着替え始めたキミは、ひよっとしてずっと考えあぐねてた？ 呆れた。

ジーンズに厚手のパーカーを羽織ったキミと戸締りを確認して、外に出る。

あっぱれ快晴、青い空。

どこまでも抜けて広い蒼。

手をつないで歩く道はぽっかぽか。

遠回りして、公園に寄ってみよう。

あ、キャッチボールしてる。

最近見ない風景だな。

キャッチボールしてた？

サッカー少年だったんで。

初耳。

言ったじゃん。

憶えてないよ。

……そっすか。

髪、伸びたね。

んー、そう？

クセっ毛だからわかりにくいかも。

髪、下ろした方がいいんじゃない？

んー、そう？

そっちのがスキ。

じゃ、下ろそう。

先月、土曜日の深夜。

キミとケンカした。

どっちが吹っつけたかなんて憶えてないし、何がきっかけだったかも忘れた。  
今までで一番でかいケンカだったね。

キミは外に出る時に大きな音でドアを閉めて、ベッドに伏して泣く恋人を振り返りもしなかった。

別れようと思った。

クライだと思った。

事故って死んでしまえと思った。

ホントだよ。

泣いて、泣いて、枕を投げて、泣いて、泣いて。

キミの大切なパソコン、壊してやろうって決心した。

目覚まし時計を右手に、パソコンの前まで行ったんだ。

あの、写真を貼ったディスプレイを見て。

あの、L判サイズに収まった2つの笑顔を見て。

あの、2人暮らしをスタートした日の写真を見て。

もしもキミが事故ったら。

事故りはしなくても、このまま帰って来なかったら。

そう考えたら、時計を投げ付けられなかったよ。

写真の2人が笑うから。

1人じゃこの部屋は広いから。

キミをウソにしたくないから。

ホントでいてほしいから。

そしたらまた泣けて来た。

泣いて、泣いて、ごめんねって言って、泣いて、泣いて。

後ろから抱きしめてくれた時、いつ帰って来たのかわからなかった。

そんなのどうでもよかった。

ごめん、ってキミが言って。

ごめんね、って言い返して。

もうどこにも行ってほしくなくて、キミを押し倒した。

気付けばもう朝で、そんな時間まで求め合う事に慣れてなかったキミは、照れて、笑って、

「外、歩こうか」

お風呂に入って、湯冷めするといけないからと心配したキミがマフラーを巻いてくれた。

その手が。

めったに見せない気遣いが。

うれしくてうれしくて、すぐに外を歩きなくなった。

2月。午前の風はすっぴんの顔をさらっと撫でて、ボクはキミの手を握った。

キミとならすっぴんでも大丈夫。

でもやっぱり恥ずかしいから、月イチにしよう。

毎月第3日曜日の午前中。

すっぴんで散歩しよう。

キミを大切に思えた朝だから。

スガオでスナオに。

これからよろしくお願いします。

今日は3月、第3日曜日。

散歩がてら、歯磨き粉とトイレットペーパーを買った。

歯磨き粉は2本。

キミはこれからも、めいっぱい歯磨き粉を使うから。

「スナオ/monthly/スガオ」

Written by nakoso

© nakoso 2008

Release Date 2008/11/20 on Bottle Novel

<http://bottlenovel.blog.shinobi.jp/>

Twitter (as inabetz) :

<http://twitter.com/inabetz>

Mail :

[nakosokan@gmail.com](mailto:nakosokan@gmail.com)



「スナオ/monthly/スガオ」 by nakoso is licensed

under a Creative Commons 表示・非営利 2.1 日本 License.

Based on a work at <http://bottlenovel.blog.shinobi.jp/>